

認知症は高齢者領域の理学療法において、日常生活自立を阻害し、転倒の危険因子としても知られ、きわめて深刻な影響を及ぼしている。認知症への対応についてはこれまで多くの報告がなされているが、近年の治療実践の進歩を概観しアプローチを理解することは重要である。そこで最近の認知症治療の実際とリハビリテーションに関する知見について焦点をあて、医療とケアのなかで理学療法士の果たすべき役割についての提言をいただいた。

#### ■認知症の病態と治療(鈴木由貴, 他論文)

理学療法の場面でも認知症の患者を受け持つことはまれではなく、その比率は増大している。理学療法の立場を念頭に置き、その概念、症状、治療と対応について概説した。認知症の症状は大きく記憶障害などの中核症状と、精神症状・問題行動といった周辺症状(BPSD)に分けられる。認知症に対する治療は大きく薬物療法と非薬物療法がある。薬物療法は、アルツハイマー病の中核症状に対してドネペジルが用いられ、BPSD に対しては抗精神病薬や抗うつ薬などの各種の向精神薬が用いられる。非薬物療法の中心をなすものは広義の認知リハビリテーションであり、従来の集団リハビリテーションに加えて、最近は患者個人に合わせた個人リハビリテーションも行われるようになってきている。

#### ■認知症者への看護アプローチ(高山成子論文)

看護アプローチは、認知症高齢者の生活の流れの中で、何か困難な状況が起こったそのときに、理由や気持ちを聞くことができ、その行動の意味が理解できるという特徴を持つ。筆者らが行った入浴拒否と攻撃行動表出状況に関する調査をもとに、入浴困難の認知症高齢者に対して、苦痛の予防、問題を焦点化して多様な援助方法を提示し、残された能力に働きかけることの重要性を述べた。

#### ■認知症高齢者への心理・社会的アプローチ—回想法を中心として(野村豊子論文)

認知症高齢者への心理・社会的アプローチの中から、回想法の意義・方法・効果・実施の留意点について、認知症高齢者の心理面・対人関係面の理解および、心理・社会的アプローチの療法としての成立要件を踏まえ検討する。1960 年代に始まる回想法の概要・回想法の個人内面への効果および社会的対人関係の側面への多面的効果を概括する。さらに、訪問ライフレビューの実際と効果を具体的事例に基づき紹介し、認知症高齢者への回想法を実践するに当たっての留意点を示す。

#### ■認知症の理学療法アプローチ—身体特性と運動療法について(小幡太志, 他論文)

近年、高齢化の進行と同時に認知症高齢者も増加の一途をたどり、2025 年には約 70 万人に上るとされている。このような中で、今まで運動器疾患を中心に展開していた理学療法も、その対象を認知症高齢者まで幅を広げ、社会のニーズに応えるべく活動を行っている。しかし現在、認知症高齢者に対する理学療法は確立されておらず、未だ様々な研究が行われているのが現状である。筆者らはその点に着目し、認知症高齢者の身体能力の確認とともに、その効果的な運動処方について、24 時間心拍数および日常生活動作・行動・身体機能の面から評価し検討した。

#### ■認知症予防と運動の関係(川副巧成論文)

介護予防対象となる高齢者のパフォーマンス向上に運動が重要であることは言うまでもない。そのため運動器へのアプローチに注目が高い。しかし、運動の実施が感覚入力と情報統合、最終的な意識的出力であれば、運動の脳機能に対する効果も十分に期待できる。近年、運動と脳機能に関する研究成果は、認知症予防の手段として運動の可能性を裏付けつつある。本稿では、筋力向上トレーニングを介した認知症予防の対象や実践、効果背景について述べる。